

47 岡山兼吉氏葬儀

〔法学新報〕第三九号 明治二十七年六月二十八日

○岡山兼吉氏

客月念八日我社友兼吉氏岡山君の訃に接し頼に涙下りて禁ぜざりしなり嗟呼數年前大谷木氏を哭し去年又松野氏を慟して今や此凶事に罹る嗚呼天焉ぞ東京法学院及我社に不幸を降すの甚しきや豈啻に法学院及我社の不幸のみならんや又天下法学を学ぶ新進小生の帰する所を知らず又明治の老師宿学をして法学の紛羅弁護の是非を正すを得ざらしむ月晶皎たらんとして雲之を翳ひ霜露夜降りて朱草枯るゝに至る嗚呼痛かな嗚呼悲かな氏の長逝するや未亡人分晩後三日にありしを以て葬儀の式は延て本月の十七日に挙げられたり今其式の次第を叙せんに聽て午後一時日本橋区西河岸なる同氏事務所より出棺するや鎌倉河岸より錦町なる東京法学院の門前を経て小川町淡路町に出て万世橋を過ぎ本郷通りに登りて順路駒込吉祥寺に到る騎馬の士長驅をなし査公十数名前道を警ましめ統て幾旒黄白の旗幾張の提灯幾百対の生花、幾百対の造花となり延々亘ること數町、燦然日光に映す中にも最も目立ちしは氏か郷里の選挙区静岡民友社の墨、黒々と氏を弔せし白旗の一旒及び東京法学院生徒、院友、事務員、各講師及び弊社等の造花となす花に次きて十数名の僧侶となり表掲の旗となる柩は実に哽咽止む能はざるの喪主の前にあり次

に親戚及び氏か生前親友と無慮三千余名の会葬者となす其間十  
有余町に亘りて絶えず、嗚呼氏は性極めて質素を貴ふ故に其葬  
儀も可成丈質素を事となし氏か生前の意に背かさりしなり而し  
て其儀例の盛大なる美麗なる莊嚴なる、上大臣より博士学士、  
弁護士、紳商を始めとし庶人に至る迄葬儀に連りしもの皆蒼然  
たる哀容あらざるものなし嗚呼匹夫にして王公貴人も及はざる  
なり又以て氏か如何に温良の長者なりしか如何に該博なる学者  
なりし乎如何に文明の教育家たりし乎察するに余あり道路見る  
もの知ると知らざると惜まざるものなしかくて一行吉祥寺の門  
前に到る数十名の僧侶柩の前後を擁して堂に入り鄭重なる仏式  
ありて後先づ岡山同窓会の総代として大原鎌三郎氏涙を垂れて  
吊文を朗読す親友、市島謙吉、山田一郎氏、法科大学総代穂積  
陳重氏、学士会総代坂谷芳郎氏、東京法学院代表者菊池武夫氏、  
東京専門学校代表者小川爲治郎氏、東京弁護士会代表者飯田宏  
作氏、法学協会代表者富井政章氏、東京法学院々友総代花井卓  
藏氏、東京専門学校々友黒川九馬氏出て亜て大隈伯、前島密氏、  
井上毅氏の吊詞代誦となる何れも当代の名士か氏か生前の徳を  
表頌し哀悼の意を誦せざるなし左に重なる吊詞を掲ぐ